

聴覚障害当事者として、シアター・アクセシビリティを推進する

シアター・アクセシビリティの向上を目指して

#07

シアター・アクセシビリティとは

廣川麻子さんは聴覚障害の当事者として、舞台芸術・文化の分野でシアター・アクセシビリティ向上を目指すNPO法人「TA-net(ターネット:シアター・アクセシビリティ・ネットワーク)」の理事長として活動する傍ら、東京



廣川麻子さん

大学先端科学技術研究センターの特任研究員、ユーザーリサーチャーとして、当事者研究に携わっている。

シアター・アクセシビリティとは、舞台芸術に誰でも接し、楽しむことができるということだ。聴覚障害、視覚障害がある人、車いすユーザーなど、あらゆる人が誰でも舞台芸術を鑑賞しに行けて、きちんと内容が伝わり、楽しむことができれば、アクセシビリティが達成されたということになる。

聴覚障害者のシアター・アクセシビリティというと、劇場での芝居に字幕や手話通訳を付けることが思い浮かぶ。しかし現在、日本で字幕や手話通訳のある演劇公演はごく限られている。字幕といっても、会場のどこかに表示する、あるいは、手元のスマホやタブレットに表示させるなど、さまざまなやり方がある。手話通訳も、黒い服を着た手話通訳者が舞台袖で通訳をするやり方もあれば、劇中に手話通訳者が衣装を着けて入り、演技しながら通訳をするというやり方もある。それらは、劇場や劇団があらかじめ準備する必要がある。

字幕や手話通訳を付けるだけでは、アクセシビリティとしては不十分だ。障害者席が後方の席と決められている場合、字幕がよく見えない、あるいは演者の顔や表情が見えづらく、誰がしゃべっているのかわからない、といった問題も起こる。さらに、受けられるサポートに関する情報をHP上などに明記したり、劇場での注意事項の説明、チケットの受付や座席への誘導等もあっての、シアター・アクセシビリティなのだ。

イギリスでの衝撃からNPO設立へ

小学校からろうの子ども劇団に参加し、演劇活動をしていた廣川さんは、日本ろう者劇団で活動していた2009年にイギリスに行き、衝撃を受けた。ロンドンでは聴覚障害者のための字幕や手話通訳の付いた演劇が定期的上演され、その情報が劇場のHPに明記され、街中で配布されるフリーペーパーにも公演情報の1つとしてリスト化されていたのだそうだ。当時、日本では、そもそも手話や字幕のある舞台公演自体が、ほ



TA-netのHP <https://ta-net.org/#>



TA-net作成の『観劇サポートガイドブック～視覚・聴覚障害者編～』
<https://ta-net.org/guidebook/>

ぼゼロという時代だった。

日本ろう者劇団は、ろう者が中心となって手話を使い活動する劇団だったが、勉強のために聴者の劇団の芝居も観たいという劇団員も多かった。廣川さんがイギリスの状況を説明すると、「すごくいいね。日本も同じような状況になったらいいのに」という仲間が増え、2012年にTA-netを設立した。

その頃、TA-netがろう者400名と聴者600名に行ったアンケート調査で、「演劇を見に行かない」理由を尋ねたところ、聴者は「忙しい」「近くに劇場がない」という回答が多かったが、ろう者は「楽しめないから」という回答が多かった。その人たちに「もし、字幕や手話通訳が付いていたらどうか」と尋ねると、約70%の人が「それなら行くと思う」と回答したそうだ。このことから、聴覚障害者であっても、サポートがあれば演劇を楽しみたいという人が多いことが証明された。そして、日本の演劇にもサポートが必要であり、そのことを啓発しなければならぬと、廣川さんは確認することができたという。

Paradigm Shift

Sachiko Takenouchi

(株)シナリオワークにて女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案を多数手がける。
2015年4月、自宅を改装し、シェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』をオープン。
(株)コンヴィヴィアアリテ代表取締役。

TA-netでの活動

#02

字幕・手話付き公演を増やす

廣川さんが理事長を務めるTA-netは「みんなで一緒に舞台を楽しもう!」を合言葉に活動を続けてきた。その活動は、「観劇支援を行っている公演などの情報収集・発信」「関係者の意識調査(利用者と提供者のニーズ把握)」「観劇を希望する人からの相談対応」「舞台に関わる団体からの相談対応」「誰でも気軽に舞台を楽しめるような企画の立案・実施」「観劇支援に関わる人材の育成・普及」と、多岐にわたる。

前述のように、設立当初日本では、字幕・手話付き公演はほとんどゼロだった。そんな中、最初に字幕・手話付き公演を取り入れたのは、いわゆる小劇場・小劇団だったそうだ。小劇場・小劇団は観客数を伸ばすために、いろいろな人に見てほしいというニーズがあった。関わっている人に若い人が多いこともあり、考え方が柔軟で、字幕をアプリで作るといったことにも積極的だった。廣川さんたちはそういった劇団に、作り方をアドバイスし、評価のフィードバック、修正などを行った。しかし、大きな劇場で字幕などのサポート付き公演が行われることはあまりなく、小劇場でのサポートも、かかる時間や手間が大きいことから手弁当では限界があり、続けるのが難しいのではと感じていたという。

状況が変わったのは2018年。「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」(障害者文化芸術活動推進法)が施行されたことだった。国の予算が計上さ

れ、助成金が交付され、公的劇場や大手の劇場でのアクセシビリティ対応が進みつつある。東京芸術劇場のほか、大劇場での字幕や手話通訳付き公演が増え、2023年にはTA-netで把握しているサポート付き公演(演劇、舞踊、伝統芸能、映画、トークショー等含む)は98件、そのうち字幕・手話通訳付きの公演は67件となっている。小劇場・小劇団でも、助成金を申請したり、クラウドファンディングを利用したりして、アクセシビリティの高い公演を実現するケースが増えているそうだ。

シアター・アクセシビリティの啓発

TA-netは啓発活動も行っている。例えば公益社団法人「全国公立文化施設協会」が毎年行っている研修会(全国2,000カ所の公立文化施設のスタッフが参加)での講演もその1つだ。「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」改正に基づき、2024年4月からは事業者による障害のある人への合理的配

慮の提供が義務化された。具体的に障害者に対してどのようなサポートをするべきかを話すことで、施設での聴覚障害者等へのサポートに関心を持つ若いスタッフが増えることを期待している。実際には上司の理解も不可欠ではあるが、積極的に関わるスタッフ同士の横のつながりができることで、施設側のアクセシビリティ促進への機運が高まりつつあるのだそうだ。

また一般の人への啓発も行っている。新聞・テレビでの発信には反響があるそうだ。ただ、ろう者の会合などで話をすると、実は反応が微妙なときもあるという。手話劇はわかるが、聴者向けの劇は見ても面白くない。手話通訳は、記者会見のように黒い服を着て立っているだけというイメージを持たれることがある。

こうしたことを解決するため、2023年には、文化庁の委託事業として、舞台手話通訳(舞台上で手話通訳者が衣装を着け、演技をしながら通訳する)・字幕・音声ガイド付き演劇と鑑賞サポートワークショップをパッケージ化したモデル事業を3カ所で実施した。こうした試みを行うことで、シアター・アクセシビリティを社会実装するための舞台関係者の経験を共有し、鑑賞サポートに携わる人材が増えていくことも期待される。



TA-netによるモデル事業として実施された舞台手話通訳・字幕・音声ガイド付き演劇「メゾン」+鑑賞サポートワークショップのチラシ



上：劇「メゾン」舞台写真。字幕と舞台手話通訳(青い衣装)。右：鑑賞サポートワークショップ。受付でのサポートについてのロールプレイング



誰もが舞台公演を楽しめる社会に向けて

#03

有名作品でのサポートと告知の重要性

シアター・アクセシビリティがよくなることで、社会はどう変わっていくのだろうか。

廣川さんは、大劇場での公演、それも有名な俳優が出演しているような作品、世の中で話題になっているような作品に、字幕などのサポートが付くことはもちろん大切だが、それを、もっと劇場自身が広報宣伝してほしいという。

最近、ある人気作品の上演にあたり、字幕を見られるタブレットの貸し出しをしているにもかかわらず、そのことがHP上などに記載されていないという例があったそうだ。まだ実験的な試みということで公表しなかったようなのだが、公表されていないと、その作品を観たいと思っている聴覚障害者にその試みが伝わらず、観るのをあきらめてしまう。実際には、問い合わせをした聴覚障害者が、観に行った体験をブログやSNSで発

信したことにより、クチコミでサポート付き上演であることが拡散し、観劇者も増えたようだ。

廣川さんは、大劇場で上演される有名作品こそ、率先してアクセシビリティ（サポートを付けるだけでなく、それを情報として発信することも含めて）に取り組むことで、障害のあるなしにかかわらず、皆が映画を観る感覚で演劇を観て、「あの劇観た？面白かったね」と、普通に話ができるようになることが望ましいと考えている。そんなふうに演劇を観ることが当たり前になり、演劇に関わりたという人が増えれば、演劇の仕事に携わる聴覚障害者も増えていく。すでにそういう人は出てきている。今後は社会のすべての場面でさまざまな配慮をすることが特別ではなく、当然のことになっていくのではないかと、いう。

コロナ禍をきっかけに、舞台公演の配信が盛んになり、字幕や手話通訳付きのものも出てきたそうだ。演劇などの配信を専門に行うサイトも生まれ、有料・無

料で舞台を観ることができる。廣川さんは、今後、字幕をより効率的に作成できるシステムが開発され、作業コストが下がることを期待している。

どの媒体にもサポート情報が当たり前提供してほしい

今後、廣川さんは、演劇などの公演情報を発信するフリーペーパーやチケット情報サイトに、公演ごとのサポートの有無や種類が必ず記載される(2009年のイギリスでは既にそれが当たり前だった)よう働きかけたいと考えている。現在はTA-netの公演情報ページを見れば、サポート付きの公演の情報はわかるが、一般的な公演情報を見ただけでは、字幕や音声ガイドが付いているかどうかかわからない。この舞台を観たいと思ったときに、公式サイトトップページにサポートの情報がなく、いちいち劇場サイトの「障害をお持ちの方へ」というページを探し、場合によっては問い合わせフォームや電話で問い合わせなければならないのでは、せっかくの鑑賞のモチベーションがそがれてしまいかねない。

また、「出演俳優や作家・演出家へのメディアのインタビュー記事や番組でも、公演のサポートの方法について尋ねる、情報を載せるといったことを行うようになってほしい」と廣川さんは言う。障害当事者のライターやレポーターが記事を書いたり、動画で報告したりするのも効果的だ。そうした露出が増えることで、障害のある人が自分も舞台公演に行ける、行こうと思うことが当たり前の中になる。そしてもちろん、障害のない人にもそれが特別なことではないと周知され、誰もが一緒に演劇や舞台公演を楽しめるようになる。そういった社会を目指して、廣川さんは活動を続けていこうと考えている。



SNS「X」に投稿されたサポート付き舞台公演鑑賞についてのクチコミ。公式では明記されていないが、鑑賞した人のブログを見て公演に行けた経緯がマンガでつぶらされている
https://twitter.com/excite_masked/status/1761747648800018534



2024年5月、市民団体「We Need Accessible Theatre!」として、帝国劇場建て替えに際してのアクセシビリティ向上を求め、2万1千筆の署名を運営会社に提出した。写真は記者会見についての共同通信の記事
<https://www.47news.jp/10904670.html>
 より詳しい記事は「CINRA 2024.05.10 Fri」
https://www.cinra.net/article/202405-weneedaccessibletheatre_hrtkzm